

# アンドレアス・シュミットの 『folk・イム・オステン』序説

——忘れられた戦時下ズィーベンビュルゲンのナチス文化雑誌と文学——

鈴木道男

序

ミュスのズィーベンビュルゲンの「文化雑誌」史研究

アンドレアス・シュミット

『folk・イム・オステン』

『folk・イム・オステン』と戦後のルーマニア・ドイツ系民族集団——小結に代えて

序

政治性の強弱を別にすれば、所謂「文化雑誌」が文化・文芸に対して重要な位置を占めるという事は、ドイツ語圏にあつてはゲーテ・シラーの『ホーレン』以来の伝統的事象というべきものであるのかも知れない。トランシルヴァニア（ドイツ名ズィーベンビュルゲン）に入植して以来 800 余年の伝統を持つドイツ人たち（ズィーベンビュルガー・ザクセン<sup>1</sup>）においては、第一次大戦の前後から、彼ら独自の文化雑誌とそこに掲載された文学作品の持つ意味が極めて大きくなる。ズィーベンビュルガー・ザクセンたちは、アウスグライヒ以来の「ハンガリー化」によって、数百年保持してきた自治の特権を剥奪された。そして第一次大戦後の「ルーマニア化」の嵐の中で、否応なしにアイデンティティーの再定義の必要にさらされた。ハンガリー時代、ルーマニア時代（と、特にその中で経験した戦間期と第二次大戦期）には、そのそれぞれにおいて、長い伝統と、その継続性と不変性を誇る彼らといえども、ソシュールの語義論的な意味で「ネガティブ」に周囲との関係で規定されるアイデンティティーが変遷をたどってきたのは当然である。いわんや戦間期と大戦期にあつては、内部的にナチズムへの積極的な関与、ドイツのfolkとしての「本国」との一体化という、「自己」の確立が、必然性をもつこととして自ら選び取られた<sup>2</sup>。そしてその際のオピニオン・リーダーの役割を担ってきたのが、彼らの文化雑誌なのである。

ザクセン人のナチズムへの積極的な関与については、彼らが長らくチャウシェスク独裁の下にあったことも手伝って、20 世紀末まで殆ど問題にされてこなかった。しかし後述の作家ウィリアム・トトク（Totok 1988）らが内部告発の口火を切ってから、ナチス時代とその後の独裁体制下のマイノリティーとしてのザクセン人内部の抑圧体制について、ドイツ語圏でも理解が進むようになった。トトクと同じ文芸グループ出身のヘルタ・ミュラー（Herta Müller）がノーベル文学賞を受賞（2009）してからは、世界がこれに注目した感がある。とはいえ、ズィーベンビュルゲンのナチズム研究は、直接ヒットラーの下にあった独塊におけるナチズム研究の深さにはいまだ到底及んでいない。

ウィーンの国立図書館で 2 つの号（Heft）を欠くほかは全巻が製本された状態で保存されてい

る第2次大戦中の雑誌『folk・イム・オステン』は、管見では、ズィーベンビュルゲンの文化史研究において引用されている例をほとんど知らない<sup>3</sup>。しかしナチスのズィーベンビュルガー・ザクセンの指導者（*Volkgruppenführer* または単に *Führer*<sup>4</sup>）が編集責任者を兼ねるこの文化雑誌が、アウストラロ・ナチズムなど、ドイツ以外でのナチス時代の文化史研究においても等閑視されているとすれば、それは奇異な現象というべきである。ズィーベンビュルゲンでは、ハンガリー化の時代から民族意識の高まりとともに相次いで重要な文化雑誌が現れ、世論をリードした。そして、戦後西ドイツなどのドイツ語圏に「引き揚げ」た人々も、その紐帯の中心となる文化雑誌を持ち続けている。この雑誌は明らかに、彼らの一連の文化雑誌の第二次大戦中のミッシング・リンクそのものというべきものである。

この雑誌を通読すれば、これが第二次大戦中のザクセン人およびその他のドイツ系民族集団自身から発信された数少ない資料の一つであり、彼らの動向を知る第一級の史料であり、かつ彼らの文化雑誌の伝統の穴を埋め、間隙をつなぐものに他ならないことは直ちに理解できる。この雑誌が無視に等しい状況におかれた理由は、これが、ザクセン人が総じてナチズムを選んで、それに身を投じたという、大戦後は触れたくも触れられたくもない過去の象徴であることは当然なのだが、そうではあっても、この雑誌そのものの紹介に加えて、この雑誌をルーマニアのドイツ人たちの文化雑誌の中に正当に位置づけることが拙論の第一の目的である。その切り口は掲載された文学作品、就中詩である。筆者（鈴木）の研究対象の一人であるヘルマン・ロート（*Herman*<sup>5</sup> *Roth*, 1891-1959）という文芸史家の関与と扱いについて注目することとなる。

## ミュスのズィーベンビュルゲンの「文化雑誌」史研究

戦間期のザクセン人の重要な文化雑誌『クリングゾール』に関する『八百年後の総決算』（*Myss* 1968）<sup>6</sup>の著者ミュスは、この雑誌と、これに先行する『カルパーテン』を比較し、後者の編集者アドルフ・メッシュェンデルファー（*Adolf Meschendorfer*, 1877-1963）をアンダーステートメントの人と呼び、前者の編集者ハインリッヒ・ツィリッヒ（*Heinrich Zillich*, 1898-1988）をパトスの人と呼ぶ。（*Myss* 1968 S.24）そしてハンガリー時代のズィーベンビュルゲンの『カルパーテン』と同じルーマニア時代の『クリングゾール』から様々なテーマに関するこの二人の見解を並べて提示し、それらはみな、『カルパーテン』と『クリングゾール』が互いに無関係ではなく、同じ胴体から出た肢節であることを証明しようとした。かくしてツィリッヒは「メッシュェンデルファーの肩の上に立ち、『クリングゾール』は『カルパーテン』の編集者がすでに思い描いていたもの、即ちズィーベンビュルガー・ザクセンの土地において精神面の革新のための拡声器になろうとする目論見を、継続していったのである」（*ibid.* S.31）と述べていた。ミュスが胴体として想定しているものは、800年の歴史を持つズィーベンビュルガー・ザクセンのとくに近現代の精神史に他ならない。そしてミュスは一言も言っていないが、彼らの「近代精神史」を描写すれば、ドイツ人のマイノリティーとしての自らに対する庇護を求めて、ナチズムに向かって一直線に進むものだといわなければならない。<sup>7</sup>

ここでまず、視野に収めるべき主要な雑誌を列挙しておく。

『カルパーテン』 *Die Karpathen* (1907-1914 クローンシュタット)：ズィーベンビュルガー・ザクセンが主な対象。最初の本格的文化雑誌。アドルフ・メッシュェンデルファー編集。

『クリングゾール』 *Klingsor* (1924–1939 クローンシュタット): ズィーベンビュルゲンが対象<sup>8</sup>。ただし、1933年以降、「血と土地の神話」にコミットするところが大きくなる以前は、ブコヴィーナの若いユダヤ人詩人を世に送り出したりもしていた。ハインリヒ・ツイリッヒ編集。

『folk・イム・オステン』 *Volk im Osten* (1940–1944 ヘルマンシュタット): ルーマニアの全ドイツ系民族集団対象。ヴァルター・マイとアンドレアス・シュミット編集。

『南東ドイツ四季報』<sup>9</sup> *Südostdeutsche Vierteljahresblätter* (1952–2005 ミュンヘン): ルーマニアからの引き揚げ者を対象にミュンヘンで刊行。一時ツイリッヒが編集。刊行期間が長いので、編集者は数多いが、「南東ドイツ」から離れて学問的にその地を見る傾向が徐々に強まっていた。当初『南東ドイツ故郷通信』(*Südostdeutsche Heimatsblätter*)の名で(1952–57)刊行が始まった。

『シュピーゲルンゲン』 *Spiegelungen* (2006–ミュンヘン): 同上。ただし『四季報』が学術誌に衣替えしたもので、学術的性格が強い。

ミュスの「文化誌」史は、2誌のクロニカルな関係を、上述のメッシェンデルファーとツイリッヒも関係を軸に、ナチスとの関連を措けば矛盾なく繋いで描き出しているほか、とくに世代間のアイデンティティーの変化に基づいて説明した2誌の関係については詳細で、説得力がある。しかしそこでは重要な2点が欠落している。一つは『クリングゾール』の廃刊から戦後及び現代に至る時期の文化雑誌との関連についてであり、もう一つは特にクリングゾールとナチズムの関係に関する十分な検討である。

拙論が扱う『folk・イム・オステン』(以下適宜 ViO と略する)は、ルーマニアのドイツ系民族グループにおけるナチスの指導者(Führer) アンドレアス・シュミットの宣伝誌でもあり、極めて政治的・時事的な性格を持つ。しかし文学・文化その他、あるいは東欧のドイツ語諸言語島の現況の紹介記事と古今の絵画彫刻の写真を含む雑誌そのもののスタイル、装丁等々からして、ミュスが扱った一連の系譜からも外しがたいという見地から、拙論とこれに続く研究では、ズィーベンビュルゲンの文化雑誌の戦時バージョンとして、この雑誌を検討することとする。この雑誌に露骨に示されるのは、八百年の独自の伝統をかなぐり捨ててドイツ本国と完全に一体化し、その「南東ヨーロッパ」の一翼を担うべきことを求める姿勢である。そしてズィーベンビュルガー・ザクセンの歴史に照らしても、—それがこのマイノリティーの「総意」に基づくものであるとはいえ—ヒットラーの臣民たるべく「民族」のアイデンティティーの書き換えを推進しようとするものであった。

前述のようにウィリアム・トクが、ルーマニアのドイツ系住民のナチズム及びチャウシェスク体制への深い関与をマイノリティーの内部から本格的に告発し始めるのは1988年になってのことである。従って、ミュスの著書が出た1968年の段階では、まだ広く明らかにはなっていなかったズィーベンビュルガー・ザクセンのナチズムへのコミットメントを含めた分析は、ザクセン人の内部からは出せる状況にはなかったというべきだろうか。

もう一つ、ミュスの試みはズィーベンビュルガー・ザクセンの内部から、その文化雑誌の連続性と変化を捉えようとしたものだが、拙論が扱う ViO は、発行所こそズィーベンビュルゲンのヘルマンシュタット(現シビウ)とクローンシュタット(現ブラショフ)だが、ルーマニアのドイツ系住民全体を対象としたものであった。とはいえ、ルーマニアのドイツ系マイノリティーの大多数がズィーベンビュルゲンのザクセン人であることを考慮すれば、この雑誌を考察の対象に

入れないということは、意図的な除外であるというに躊躇する理由はないのである。

「クリングゾール」誌の指導者ツイリッヒについて、次節で触れる J. ベームは簡潔に「ルーマニア・ドイツ人のファシズムの先導者であり、先駆的思想家であったのはハインリヒ・ツイリッヒである。彼の小説・詩・論説・記事、そしてインタビューは、すでにナチスがドイツで権力を握るよりも前から「民族的 (völkisch)」な世界観を用意していた。ナチスの民族という妄想と、異文化への過度の危惧を組織的に煽動することは 1933 年から国策となったのだが、ツイリッヒの詩の中ではすでに 1929 年にテーマとして道具立てになっていた」(Böhm S.60) と述べる。この点に限れば、実はゾーベンピュルガー・ザクセン以外の一部の識者にはすでに常識、あるいは陳腐にすら聞こえかねない内容なのだが、拙論ではこれが重要な導きの糸になる。

## アンドレアス・シュミット

ゾーベンピュルゲン<sup>10</sup> の中心都市のひとつクロンシュタットで第二次大戦中に発刊されていた新聞「クロンシュタット新聞」*Kronstädter Zeitung*<sup>11</sup> も、ナチズムの直接的なプロパガンダがこの地に「上から」浸透してゆく過程をつぶさに描き出す資料である。1940 年 11 月 12 日にはルーマニアのドイツ語諸言語島を統一する形でのドイツ系民族集団のナチ党結成が報じられ、引き続き在ルーマニア・ドイツ系民族集団のフューラー (Volksgruppenführer) として突然若いアンドレアス・シュミットの名が告げられるや、間もなく彼の写真が紙面一面全体を飾り、彼の言葉が新聞全体を席卷する。それから間もなくフラクトゥーア (ドイツ文字) ではないラテン文字の活字が、初めはパッチワークのように現れ、徐々に広がって行った。ドイツ文字こそゲルマン的であるとしていたヒトラーが 1941 年 1 月 3 日から掌を返したように推進した、ドイツ文字の廃止とラテン文字の使用に呼応するものである。一介の政治青年であったシュミットは、瞬間にルーマニアのドイツ系住民全体の指導者となった。それと時を同じくして黒い十字の交点に小さいハーケンクロイツを配したナチス十字を付した戦死者の死亡広告が増え、同盟国日本の新艦艇の進水式などの情報が、翌日には写真入りで大きく取り上げられるなど、軍事色が前面に出た紙面であった。この新聞は敗色が濃厚になる時期に次第に日刊を保てなくなり、ソ連軍のトランシルヴァニア侵攻によって廃刊を迎える。

シュミットについて、筆者 (鈴木) はこの新聞等を通じてその生涯と主要な「実績」に関しては把握していたものの、詳細な研究は殆ど目にする事がなかった。しかしヨハン・ベームは『1945 年前後におけるルーマニアのドイツ系民族集団のヒトラーの手下ども』(Böhm 2006) なる一書を上梓しており、その中には彼に関する伝記的な事実がはじめて詳細に紹介されていた (S.161-174)<sup>12</sup>。題名からして既に、中立的というよりは、ナチスの一翼を担った人々の人格を貶める書き方であるのはドイツ語圏で戦後に出版されたものとしてはまことに当然のことである。しかし文献を正確に列挙し、学術的な内容を持つ本書によって、シュミットがヒムラー等の帝国中枢部の権威を盾に、いかにトランシルヴァニアに君臨していったか、そしてその手段は何であったのか、人々は如何に彼を受け入れたか、といった点が明らかにされた。

このシュミットが自ら編集長<sup>13</sup>として刊行した文化雑誌が ViO 即ち「folk・im・osten」(*Volk im Osten* 『東方の民族<sup>14</sup>』) である。その意を解して訳せば『東欧のドイツ民族』ということになる。雑誌の副題は「南東地方の雑誌」。この南東地方 (南東ヨーロッパ) が主としてルーマニアを指すことについては、拙論 (鈴木 2009 S.42) を参照されたい。ただしこの雑誌において「東

方」はスロヴァキア以南、ハンガリーからセルビアまで、即ちドイツ本国が併合した国々の外側、東欧の南東部に広く拡張されている<sup>15</sup>。以下、現在までに判明している<sup>16</sup>シュミットの生涯について文化面への影響を視野に入れて略述する。

ベームによれば、アンドレアス・シュミットは1912年5月24日ズイーベンピュルゲンのメディアアシュ近郊の裕福な農家に生まれた。メディアアシュのギムナジウムでアビトゥア（大学入学資格試験）に失敗する。1929-30年ルーマニア系ギムナジウムに通い直してそこでアビトゥアを得て、ルーマニア語を用いるクルージュ・ナポカ大学の法学部に入学するが、間もなく退学する。30年にはドイツ系マイノリティーのボランティア労働施設で政治に接近し、32年には施設長となる。36-38年には、北ズイーベンピュルゲンをハンガリーに割譲することを約束したナチスが主導する、ドイツ系住民のドイツ「帰還」運動に参加し、ナチスの指導者たちにさらに接近する。そしてSS（ナチス親衛隊）の大将<sup>17</sup>及びSS本部長であったゴットロープ・ベルガーの娘クリスタ<sup>18</sup>と結婚し、SS圏内で個人的なコネクションを確立した。ベルガーと謀ったシュミットは、「千兵行動」<sup>19</sup>（1000-Mann-Aktion）を組織している。

ドイツで徹底的にナチズムを叩き込まれてから、開戦後にズイーベンピュルゲンに戻ったシュミットは、ベルリンのSD（Sicherheitsdienst: ナチの秘密諜報機関）のために、ルーマニアのドイツ系民族集団の構成員と共に、よく機能する諜報組織を構築した。ナチスを支持する二つの民族組織DVR（Deutsche Volkspartei in Rumänien『ルーマニアドイツ民族党』）とVDR（Verband der Deutschen in Rumänien『ルーマニアドイツ人同盟』）との確執を嫌ったベルリンの指示で、SSがシュミットをルーマニアのドイツ系民族集団の長に任命したのは1940年9月27日のことである。（以上Böhm 2006より要約）。シュミットはドイツ支持のアントネスク政権にあからさまに追従し、ザクセン人の財界もコントロールする手腕を見せることになるが、おおむねベルリンの傀儡としての手腕である。急激にナチ化する若い世代と旧世代の摩擦を収束させるなどは、各地で若い指導者を擁立していたナチスの定石に従い、大きな抵抗もなく処理した。ドイツ系住民のナチ政庁を、長くオーストリアのズイーベンピュルゲン政庁であったヘルマンシュタット（現シビウ）から、バナートと旧ルーマニア領のどちらのドイツ系住民とも中立であったクローンシュタット（現ブラショフ）に移した<sup>20</sup>。シュミットとドイツ系住民の関係については、ウィリアム・トトクの告発の書『思い出の抑圧』<sup>21</sup>の言葉（Totok 1988 S. 35）を借りる。

「ドイツ系民族集団は1941-1944の時期、大ドイツ主義のナチ政策の隷属的な道具へと作り上げられた。地域の指導者であるアンドレアス・シュミットに対して、ファシズムのルーマニア国家は、国内のドイツ人たちの命運を決定する全権を委任した。ただし民族集団の指導部は、御しがたいドイツ人たちに抑圧的な措置を講ずる必要に迫られるのはごくわずかな場合だけであることに気が付いた。というのは、大衆はさなきだに自由意思でファシズムの手に落ちていったからである。政治的に優柔不断な人々でさえ、あからさまな感服を示しながら、ヒットラーがあげた成果を横から眺めていた。スターリングラード陥落の後、熱狂が醒めるということにはなかった。ルーマニアのドイツ人の中にも、破滅の時に至るまで、究極の勝利の信奉者がいた。戦争のすぐ後になって、当然のことながらルーマニアのドイツ人たちも何も知らされていなかったと主張したのである。」

ベームは、シュミットの「学校及び教会政策は彼の在職期間の内でも最も不快な1章と呼ばなければならない」（Böhm S.169）と述べ、彼が1943年にルター派のズイーベンピュルゲンでも、カトリックのバナートでも、その他の地域においても、ドイツ系住民の教会においては統一的に、

宗教的な祈りに代えて自分のスピーチ（の代読）でクリスマスの祝祭を始めるように指示したことを例に挙げている。これが、トトクが述べた「御しがたいドイツ人たちに抑圧的な措置を講じたごくわずかな場合の一つなのであろう。しかしさすがにこれに対しては憤慨の嵐が吹き荒れ、シュミットは指示を取り下げた。

1941年2月7日、ルーマニアのドイツ系民族集団のナチ党のプロパガンダ指導者ヴァルター・マイ（Walter May, 生没年不詳）はシュミットの下、すべての新聞雑誌編集者を集め、親ナチ以外に固執する者を定期刊行物の編集から除外する旨通達し、大粛清を敢行する（Böhm S.175）。とはいえ、管見ではこの粛清に大きな抵抗があったことを記した資料を見たことはない。このマイが、シュミットとともにViOの編集に当たるのである。

戦況が変わって、クローンシュタット駐在のドイツ軍はルーマニアの単独講和の後、籠城体制を取るべく集結した。指揮官はホンテルス校に仮兵舎を構えた。この建物は野戦病院にも、ドイツ軍の南部前線部隊の将校宿舎にも充てられていた。この学校（ギムナジウム）は、クローンシュタットの精神的な拠り所である「黒い教会」<sup>22</sup>の教区民組織が運営するものであり、隣接するこの教会同様、拠り所としての意味を持っていた<sup>23</sup>。つまり、クローンシュタットのズィーベンピュルガー・ザクセンの最後の砦なのであった。

1944年8月25日に、兵役能力のあるすべてのドイツ系男性がホンテルス校に招集された。主に、この学校の生徒<sup>24</sup>を含む16～17歳の若者が応召したので、教室で将校が簡単な火器の講習を行った。低学年の学徒動員である。

1944年11月5日から6日にかけての夜、ソ連軍の囲みを逃れてルーマニアの親ナチス抗戦派を頼って北ズィーベンピュルゲンのノイマルクトからヘルマンシュタットへ向かおうとした飛行機が事故を起こし、シュミットは奇跡的に難を逃れたものの、結局ソ連軍に捕らえられた。彼は、25年の懲役刑の判決を受けたモスクワを経て、ドンバス炭田に送られた。そして死因は不明ながら1948年の4月にヴォルクータの懲罰収容所で死去した。この48年死亡説は、ミュス編（1993）の『ズィーベンピュルガー・ザクセン事典』（Myss1993）の記載事項でもある。ベームが一説として挙げるオットー・リース博士の説によれば、1945年に飛行機が撃たれた後、ドンバスで1952年まで生き、友人に抱かれながら結核で亡くなったとのことである。

## 「フォルク・イム・オステン」<sup>25</sup>

ナチズムの宣伝雑誌とはいえ、ViOという雑誌に寄稿した人のほとんどはルーマニアのドイツ系民族集団か、あるいはルーマニアを母語とする同盟国のルーマニア人である。ベルリンから、即ち上からの寄稿者はほとんど見られない。シュミットとSSの指導層によって「上から」作られた雑誌とはいえ、あくまでもルーマニア・ドイツ人の雑誌なのである。プロパガンダのための政治経済戦況報告などには、拙論では踏み込まない。毎号のように、巻頭及びその近くにシュミットの時事論文が掲載されていることを指摘するに止める。文学作品は、論文の間に挟まれることもあれば、別してコーナーを設けて掲載されることもある。シュミットはもちろん、文学に関しては門外漢であったが、『クリングゾール』の名付け親<sup>26</sup>であるヘルマン・ロートをはじめ、言語学者であり作家であったベルンハルト・カペジウスのような、『クリングゾール』に寄稿していた論客たちが歴史・文化・言語の様々な論文を寄せている一方で（カペジウスは書評欄も担当する）、『カルパーテン』の編集者メッシェンデルファーも、散文作品（とくにヒトラーに期待を

寄せる小品) やその抜粋を載せている。この中で、拙論では例としてヘルマン・ロートを取り上げ、この雑誌の前後における彼の扱いを軸に、上記諸雑誌の連続性を確認することとする。H. ロートが 1941 年に行われたズーベンピュルゲン出版界の粛清 (Böhm2006 S.175) 以降、この雑誌に登場しないことは救いだ、などというわけにはいかない。1944 年 1/2 号の巻末の編集部注には、この号に掲載されたルーマニア人コシュベク (Gh. Coşbec) の詩が、H. ロートの許可を得た彼の翻訳の転載である旨が記されている。ロートは最後までこの雑誌との関係を断ってはいなかったのである。筆者は拙論 (2007) の末尾を「クリスマス革命の後、ザクセン人が続々とドイツに「帰郷」したが、彼らが帰るべき故郷が、800 年の伝統を持つズーベンピュルゲンではなくてドイツであるという認識が確認されたのが戦間期であり、その手段・媒体が『クリングゾール』誌や、その同人たちからでた『故郷の心』というアンソロジーであったこと、すなわちナチス・ドイツの宣伝パンフレットによるのではなく、ザクセン人の中から形成されていったことに注意を喚起して本論を閉じる」と結んだ (S.134)。この詩集『故郷の心』の編者が、H. ロート<sup>27</sup>であり、ツィリッヒが本国に移ってから『クリングゾール』の編集を担当した H. クラッサーであったことから、戦中期以降のルーマニアおよびドイツへ引き揚げたドイツ人の雑誌におけるロートの位置を観察することが、雑誌の継続性を測る上で重要なのである。抒情詩やリリカルな歴史的事物の発掘に関する文章には好感が持てる人物なのだが、身を置いたのがナチズムの真只中でありすぎただけのようでもある。しかしこのコミットメントが事実として重大な意味を持つことになる。

ここで一度 ViO 掲載の文学作品に目を転じる。注目するのは詩である。詩はルーマニアのドイツ文学の中で大きな位置を占めるものであるからである。軽い小説 (とその抜粋) が多くを占める ViO の文芸作品は概してかなり質が低い。一連のズーベンピュルゲンの文化雑誌に比べて、詩の比率が低く、散文作品が多いのだが、散文作品は通俗文芸とは言わないまでも、普遍的な価値をもつ文学とはとても言えない代物であることが多い。『クリングゾール』は文学をリードする矜持を持った人々が作品を同人として寄せる雑誌であったが、ViO が収録するものは、若い世代を中心として、創作欲のある人々のうちからナチズムの精神に合致するかしないかを最大の基準として収録したものであるように見える。詩と同様である。『クリングゾール』に掲載されたものは、確かに拙いものも少なくはなかったが、独特の香気と精気を放っていた。戦後の『南東ドイツ四季報』、『シュピーゲルンゲン』においても同様である。<sup>28</sup> 詩で一連の雑誌の内容の比較を試みるのは無駄ではないと思われるので、ズーベンピュルゲンナチスの文芸雑誌 ViO から詩を 3 篇のみ引用してみる。<sup>29</sup>

Auch wir geloben<sup>30</sup>

von Arnold Roth

我々も誓う

アルノルト・ロート

Es grüßen Dich die zwanzig Millionen!  
Sie wissen: nach der bitteren Leidenszeit  
Wird Freude auch in ihren Hütten wohnen  
Und diese Freude wird zur Ewigkeit.

二千万人が貴方にご挨拶いたします。  
彼らは知っています。苦難の時を経て  
喜びが彼らの陋屋に宿らんことを  
そしてこの喜びが永続するだろうことを。

O, was sind dann die vielen stummen Wunden,  
Die man den Einsamsten der Deutschen schlug?

ああ、かくなれば最も孤独な独逸人達が  
受けた数多の物言えぬ痛手は何するものか。

Sie haben ihre Sendung neu gefunden                    彼らは改めて自分の使命を見出し  
 Und greifen singend wieder zu dem Pflug—            歌いつつ再び鋤を握ります——

Du bist der Pol, das lichte Himmelszeichen,            貴方は天の極だ。輝く天の目印だ。  
 Um das sich hundert Millionen Deutscher drehen,      貴方の周りを一億のドイツ人が巡ります。  
 Du bist die Achse und wir sind die Speichen,           貴方が軸で我々はあらゆる国を  
 Die herrlich über alle Lande gehn!                      堂々と経めぐる輻なのです。

この詩の中にヒットラーという言葉は一つもないが、明らかに彼に対する最大限の賛辞である。ViO という雑誌の基本精神を3連で必要十分に表現したかのような詩でもある。二千万の東欧ドイツ系民族集団が、心からヒットラーに忠誠を誓おうというのである。しかし散文に安易に韻律を付けたようなこの作品の質はどうだろう。実はこの詩人は『クリングゾール』にも1930年に詩を寄せていて、それについて、ミュスがすでに「(アルノルト: 訳注) ロートの『クリングゾール』に発表された詩を読んだ人は、音とリズムが彼のつかみ取った内容に軽やかに按配されている。しかしあまりにも軽やかに。(中略) ロートの詩節が音楽に満ち新鮮な血が脈打っているものであることはいたるところで確認できる。しかしそれにもまして残念なのはこの若い抒情詩人は血と土地の神話にあまりにも身を委ねすぎている」(Myß 1968 S.83) と批判していた。そのせいで彼は以後どの雑誌にも現れず、戦後はドイツにいたが作品は発表していないという (ibid.)。ズィーベンビュルゲンのナチズムを先導したともいえる『クリングゾール』の中でさえ、この人物は明らかに浮いていた。ViO は彼の最高の舞台だったことだろう。次に戦死者を悼んだ、別の作者の詩を見る。

Tote Helden<sup>31</sup>

身罷った英雄たち

<p>Sie gaben der Mutter den letzten Kuß,                  Sie winkten der Liebsten den letzten Gruß,                  Dann ging es hinaus in die Ferne —                  Ein ruhiges Lächeln im Gesicht,                  Im Herzen ein klares und schönes Licht,                  Sie gingen so stolz und so gerne                  ...                  Und von den Männern, die Helden sind,                  Soll singen noch Kind und Kindeskind —                  Und knospende Mädchen sich sehnen —                  wenn einstens in freudiger, seliger Zeit                  All euren Glanz und Heerlichkeit                  Die Sagen und Märchen erwähnen.</p>	<p>彼らは母親に最後のキスをし、                  最愛の人に最後のさよならを言い、                  するともうずっと遠いところへ——                  静かな微笑みを顔に浮かべ、                  心には澄んだ美しい光をともし                  彼らは胸を張って喜んで赴いた。                  ...                  英雄である男たちのことを、                  子も子の子もうたい継げ——                  そして芽を吹く娘たちは恋い慕え——                  いつか喜ばしい至福のときに                  君たちの栄光のすべて                  伝説と物語を語り継げ。</p>
--	---

これは5連からなる詩の冒頭と末尾の2連である。勝利を信じて進んで武装親衛隊に入隊していった若者の中の死者が日を追って増えていく頃の、同じく勝利を確信していた一婦人(マル

ティーニ＝シュトリーゲル)の詩である。真心がこもっていることも、古典的な押韻が間違いではないことも認めるに吝かではない。しかしこれとても、あえて韻文にするべき内容なのだろうかという疑問がおのずと湧いてこざるをえない。

故郷を詠む詩は、戦間期以降ザクセン人が量産してきた。このような詩の生産と共感的受容が、マイノリティーの紐帯を強めてきたのである(鈴木2007参照)。ヨハネス・リンケなる人物の故郷の詩を見てみよう。<sup>32</sup>

Berg der Heimat

故郷の山

An deinem Hängen reift kein Wein,  
In deinen Tiefen glüht kein Erz.  
Und doch — wo möcht ich lieber sein,  
Wo schlug so hoch mein Herz?

お前の山腹にブドウは実らず、  
お前の谷底に銅がきらめくこともない。  
それでも——どこにもっと私は居たいのか、  
どこで私の心はこんなに高鳴るか。

Dich hüllen Wind und Wolken ein,  
Du rauschst im Herbst, du braust im März,  
Und deine Brunnen quellen rein  
Zu Tal und in mein Herz.

風と雲がお前を包み、  
お前は秋にざわめき三月にはとどろく、  
そしてお前の泉は清らかにあふれる  
谷へと、そして私の心へと。

Du trägst nur Trümmer, Fels und Stein,  
Hebst deine Wälder himmelwärts,  
Empfängst des Morgens ersten Schein  
Und lenkst ihn in mein Herz.

お前には山塊と岩と石しかない。  
雲を払って森々を天の方へと持ち上げ、  
お前は朝の最初の曙光を受ける、  
すると光は私の心に届くのだ。

これはナチスの「血と土地の神話」に沿うもので、戦時中のムードとも矛盾するものではないとはいえ、戦況を絡めたものにも見えず(というよりはそれに絡めて作詞することに失敗したものとすべきか)、詩としてもおそらくは駄作に過ぎない。文化雑誌が掲載する文芸作品は、一国あるいは一地域の文学をリードするという気概が見えて当然なのだが、ViOには概してそれが見えないのである。

こうした文芸作品や、ナチス絵画、はてはクローンシュタット近郊の植物まで取り上げた文化雑誌の「文化」の実情が、その熱気に比していかに寒々としたアマチュアレベルのものであったかが容易に理解されるのではなかろうか。

興味深いことに、先に挙げた盟友のヘルマン・ロートや文芸文化史家カペジウス、さらには戦後においてもズィーベンピュルゲンの歴史学をリードし続けたK.K. クラインまでもが寄稿しているにも関わらず、4年半にわたって続いたViOに、ツイリッヒが寄稿したことは一度もない。すでにドイツ本国に渡っていた<sup>33</sup>とはいえ、ズィーベンピュルゲンとの連絡を絶ったことは一度もなく、しかも前掲のベームのようにズィーベンピュルゲンのナチズムを精神的に先導したと言われるほどの人物にしては奇妙な事態である。ツイリッヒがドイツに移住した後、彼の指示を受けながら『クリングゾール』の編集に当たったクラッサーも、ViOとは無縁であった。実は『クリングゾール』廃刊の年の1939年5月号巻末の編集後記は「我々の雑誌の4月号はもう印刷準備

が終わっていましたが、編集部の側によらない理由で発行が差し止められ、内容を差し替えられました。そのため、ようやく今、(4月号は：訳注)5月号と同時に刊行・送付されます」<sup>34</sup>という文章で閉じられている。1941年のヴァルター・マイによる出版界の粛清の前に、事態はかなり着々と進んでいたように思われるが、この編集後記は、当局との確執をあからさまに表現することを避けたものとみられる。当局はおそらく、この雑誌をViOと同様のものに内容に組み換え、ズィーベンビュルゲンから在ルーマニアの全ドイツ系住民のための雑誌に改組しようとしたのではなかろうか。実際には「クリングゾール」は廃刊され、ViOがそれにとって代わるかのように創刊される。すでに2年間「クリングゾール」の直接的な編集から離れていたツィリッヒが、一切ViOには寄稿していない背景にはこれがあり、ツィリッヒは自分なりの「文化雑誌」観を通してのように思われる。掲載される文化記事の内容の程度の低さにも、彼は耐えらなかったのかもしれない。

ViOの最終号に近づくと、戦況の変化について直接言及せず、代わりに激しい論調で敵を非難する論文が増えるが、編集そのものに大きな変化はない。ただし1944年の4-6月号合巻の巻末(裏表紙)は、公的雑誌であることを示すかのように、発令者なしで、すなわちシュミットの言葉であるという形をとって

#### 空襲警報発令の際には

各自身分証明書と身上書を防空壕に持参のこと。壕内には常に食料(パン、バター、砂糖等)および飲料水、冷やした茶、さらに懐中電灯と石油ランプを備蓄すべし。

という文句が大きい活字で記されて終わり、1944年の7号の巻末には同様に

#### 空襲警報発令の際には

敵機の爆弾よりも、性急な行動や規律の欠如の方が大きい損害を引き起こしうるものである。

とある。いずれもソ連軍の侵攻という差し迫った戦局をあからさまに映している。そしてこの7号でこの雑誌の命運も尽きる。

### 『folk・イム・オステン』と戦後のルーマニア・ドイツ系民族集団——小結に代えて

上記のザクセン人の『クリングゾール』、全在ルーマニア・ドイツ系民族集団を対象としたViOの連続の検討の次に、西側に引上げたルーマニアのドイツ系民族集団を対象とした『南東ドイツ四季報』(およびそれが学術雑誌に衣替えした『シュピーゲルンゲン』)の連続性を検討してみる。雑誌の対象となる読み手には差があるように見えるが、実は殆ど同一なのだということは縷々述べたとおりである。

戦後ドイツ語圏に引き揚げたルーマニアのドイツ系民族集団の人々が発行し続けている『南東ドイツ四季報』(以下『四季報』と略する)には、初期の号の寄稿者たちの言葉遣いにナチ的言い回しが残っていてむしろ微笑ましい<sup>35</sup>が、内容からはナチス色は一掃される。当然のことである。そしてViOとは人的連続性に乏しいのも、戦後の西ドイツで刊行が始まった雑誌としては当然かもしれない。しかし民族集団を代表する雑誌として、その政治的方向性はともかく、扱っている分野は実はViOと酷似している。文芸あり、文化史あり、時事問題あり、各地の同胞の消息ありなのである。これは各誌の目次を比較すれば一目瞭然である。ただし、「四季報」以降に時折組まれる、一人の重要人物に紙面の大半を割く記念号はViOには見られず、これはむしろ『クリングゾール』の伝統を受けたものである。1959-80年の長きにわたって、ツィリッヒ

がこの雑誌の編集（共同発行責任者）を引き受けていたことは、『クリングゾール』と『四季報』の親和性を現わしている。

『四季報』において、ViOに関係した人物が除外あるいは無視されているのかといえば、それは否である。それを見るためには、『四季報』が50年ほどの歴史を重ねているので、世代の交代があることを考慮しなければならない。ViOに拠った人々との関連を見るためには、初期の巻を対象として検討するのが適切である。ちなみにツイリッヒはその前半に特に大きく関与していることになる<sup>36</sup>。

前節で取り上げたハラルト・ロートを例にとろう。戦後ドイツには「引き揚げ」ず、ルーマニアに残ったロートは、1945年に、共に『故郷の心』を編んだクラッサーとともにルーマニア官憲に逮捕された。ズーベンビュルゲンの方言民衆詩集の発行が理由であった。<sup>37</sup>その後ルーマニア内のドイツ系文芸雑誌等には寄稿が許され、1945年からザクセン人の自治に関する一連の歴史分野の著作を発表していたが、1948年以降は中断を余儀なくされたらしい。西側の『四季報』その他に寄稿することもかなわなかった。1958年に68歳で没している。

『四季報』1960年1号の巻頭に二人の編集者ハンス・ディプリヒとハインリヒ・ツイリッヒが若い砌にロートのために詠んだ詩が掲載され、ツイリッヒは追悼文を書いている（Zillich 1960）。そこにはViOの題名もなければ、ナチズムを示唆するものもない。ドイツ各地の大学でいたずらにゼメスターを重ね、以後も特段の定職にも恵まれなかった人の良い永遠の文学青年として描かれるのみである。

すなわち、ViOに象徴されるルーマニア・ドイツ人のナチズムへのコミットメントを封殺した形でH.ロートの追悼文が書かれ、戦中期がなかったかのように、まるでこの雑誌もともに闇に葬り去られている。これはViOを知り、通読した眼には違和感を覚えざるを得ない。そして、それを書いたのは、ズーベンビュルゲンのナチズムをリードしていたツイリッヒなのである。

上述のようにツイリッヒ本人は1937年からドイツ本国に暮し、シュミットのViOには一切関係を持たなかった。それが彼のこの時期のルーマニアのナチズムへの関与を否定する理由にはならないことは当然である。しかし日本の戦後の一億総懺悔の状況と同様に、当時の西ドイツで、戦時イデオロギーの形成に大きな働きをした彼が大きな批判の対象となることはなかった。その彼がH.ロートの「戦時」を封殺したのである。この図式は一般化できる。すなわち、『四季報』は明らかに『クリングゾール』との連続性を持ち、その点までは誰も何も隠そうとしない。しかし、多くを継承しているにもかかわらず、ViOとの連続性には、口を閉ざすのである。

ズーベンビュルガー・ザクセンをはじめとするルーマニアのドイツ系民族集団の状況は決して同様とは言えない。戦間にドイツ国民としての自意識を確立し、国民として全力を尽くして東部戦線を戦い、多くがルーマニアにおける長い伝統を捨ててドイツに「引き揚げ」た人々の歴史は覆いようもない。問題は、文化史の分野で、ルーマニアにおける彼らの「戦中」が隠されるということなのである。

拙論は、ボリュームとしては38号に及ぶこの雑誌が教える最も重要なことは、ルーマニアのドイツ系住民の一般人が戦間に自ら涵養していったドイツ国民化と親ナチズム化のイデオロギーを、「上から」与えられたこの雑誌において遺憾なく発揮していること、そうすることに彼らは抵抗を示さなかったことをみた上で、この雑誌を一連の彼らの文化雑誌の中に位置づけようとする試みであった。しかし、彼らの戦前戦後のふるまいとその要因は覆いようもない事実であるのに、なぜこの雑誌の存在すらも注目されないのか、その要因は拙論で述べたことには尽きな

いものがあるように思われる。それはあるいは、彼らの中の世代交代とセクトの対立にも求めうるかもしれない。今後の課題である。

本論は平成 24 - 26 年度日本学術振興会科研費基盤研究 (C)「新世代ディアスポラの系譜書き換え—告発の文学の求心性とダブルバインド」(研究代表者鈴木道男)の助成を受けた。

## 文献

### *Volk im Osten*

- 1940 1 (Aug.), 2 (Aug.), 3/4 (Sep.), 5 (Okt.), 6 (Okt.) 7/8 (Nov.)  
1941 1/2 (Jan.), 3/4 (Febr.), 5 (März), 6 (Apr.), 7 (Mai), 8 (Juni), 9 (Juli), 10 (Aug.) 11/12 (Sep.),  
13/14 (Okt.) 15 (Dez.)  
1942 1 (Jan.), 2 (Febr.), 3 (März-Apr.), 4 (Apr.-Mai), 5/6 (Mai-Juni), 7/8 (Juli-Sept.), 10/11 (Sept.-Dez.)  
12 (Dez.)  
1943 1/3 (Jan.- März), 4 (Apr.), 5/6 (Mai-Juni), 7 (Juli), 8 (Aug.), 9 (Sept.), 10 (Okt.), 11/12 (Nov.-Dez.),  
1944 1/2 (Ja.-Feb), 3 (?), 4/6 (Apr.-Juni), 7 (Juli) +Neujahrsgabe

Böhm, Johann (2006) *Hitlers Vasallen der Deutschen Volksgruppe in Rumänien vor und Nach 1945*. Frankfurt a. M. / Europäischer Verlag der Wissenschaften

Diplich, Hans Hrs. (1960) *Südostdeutsche Vierteljahresblätter*. 9. Jahrgang Heft 1, München

Gunesch, Heinz (1998) Erinnerung eines Honterusschülers an die Jahre 1940-1948 in *Die Honterusschule zu Kronstadt*. München/ Verlag Neue Kronstädter Zeitung

Guțu, George (1990) „Und vor dem Fenster waren die Träume“ — Moslfred Malgul-Sperber. In: *Neue Literatur* Jg. 41 (1990) H.3-4

Myss, Walter (1968) *Fazit nach achthundert Jahren. Geistesleben der Siebenbürger Sachsen im Spiegel der Zeitschrift „Klingsor“ (1924-1938)*. München/Verlag des Südostdeutschen Kulturwerkes

Myss, Walter (Hrsg.) (1993) *Lexikon der Siebenbürger Sachsen*. Thaur bei Innsbruck/ Wort und Welt Verlag

Totok, William (1988) *Die Zwänge der Erinnerung. Auszeichnungen aus Rumänien*. Hamburg/ Junius

Zillich, Heinrich (1960) „Herman Roth †“ in *Südostdeutsche Vierteljahresblätter* 9. Jahrgang, S. 34 f.

Zillich, Heinrich Hrsg. (1960) *Klingsor* Mai 1939 Heft.5

鈴木道男 (1997) ルーマニアのドイツ言語語島の文化的意味について I. 三つの言語島の過去と現在、東北大学言語文化部『言語と文化』第 8 号

鈴木道男 (2000a) ドイツ語文学・郷土文学・マイノリティ文学 ズィーベンビュルゲンの文学 (1) ——ルーマニアのドイツ言語語島の文化的意味について II——、東北大学言語文化部『言語と文化』第 11 号

鈴木道男 (2000b) ズィーベンビュルゲン・ドイツ人の民族意識と文学、平成 10-11 年度科学研究費補助金研究成果報告書『ヨーロッパ再編にみる地域意識と文学』(課題番号 10610529) S. 20-29

鈴木道男 (2002) ズィーベンビュルゲン・ザクセン人の起源とアイデンティティーの変遷について、平成 13 年度東北大学大学院国際文化研究科プロジェクト経費研究成果報告書『東欧多言語文化社会の形態的研究』pp. 1-8

鈴木道男 (2004) ディアスポラの観点からのドイツ文学研究における未開領域：ズィーベンビュルガー・ザクセンの存在とその文学、原研二編『ディアスポラの文学』(日本独文学会研究叢書 027) S.52-61

鈴木道男 (2007) ディアスポラの紐帯としてのアンソロジー——『故郷の心』とズィーベンビュルゲンの国家社会主義について——、東北ドイツ文学会『東北ドイツ文学研究』Nr. 50 S. 121-142

鈴木道男 (2009) 帰還「南東ドイツ人」意識の変遷 (1)『南東ドイツ四季報』に拠る人々と詩、平成 19 年度～20 年度科研費補助金 (基盤研究 (C))「グローバル化によるディアスポラ文学の変容—ディアスポラ・アイデン

註

- 1 拙論では誤解の余地がない限りズィーベンビュルガー・ザクセンを単にザクセン人と呼ぶ。彼らの出自およびアイデンティティの変遷の概略については鈴木 2002 参照。
- 2 とくにこの点に関しては鈴木 2007 S.121-126 参照。
- 3 ドイツ語圏の他の公立図書館ではこの雑誌は発見できなかった。
- 4 「フューラー」という言葉にはヒトラーに用いられる場合「総統」という定訳があるが、地方の指導者にも同じ言葉が用いられており、この場合の定訳はない。
- 5 人名のヘルマンは通常 Hermann と記されるが、この人物は語尾の n が一つの Herman である。
- 6 この文献は古いが、これ以降『クリングゾール』についてのまとまった研究はない。
- 7 この状況については鈴木 (2007) S.121-126 参照。
- 8 『カルパーテン』と『クリングゾール』の間には『オストラント』や『ツィール』のような興味深い雑誌が刊行されていたが、ここでは割愛する。
- 9 『南東ドイツ四季報』及び『シュペーゲルンゲン』については鈴木 2009 参照。
- 10 トランシルヴァニアに対するドイツ名。
- 11 この新聞は 1849 年から断続的に発行されていたが、1940-44 年はナチス色を強めた新聞として日刊で発行されていた。公的図書館では唯一ウィーンの国立図書館でのみ全紙閲覧できる。
- 12 この本の文献表に ViO があるのを見て筆者は溜飲を下げた。しかし直接の引用は乏しい。
- 13 実務的な編集長としては、ヴァルター・マイ (Walter May) があつた。Böhm2006 S175-194 によれば、この人物はルーマニアのドイツ系民族集団の出版及びプロパガンダの責任者である。生没年不明。
- 14 拙論における「民族」は一義的に、多分に人種的概念である Rasse の意味合いを含むナチスの Volk の訳語である。
- 15 例えば、1942 年 5-6 月号の目次に、各地域のドイツ系住民の動向を扱う「南東のドイツ世界」のコーナーでは、ルーマニアの他にクロアチア、セルビア、スロヴァキア、ハンガリーが扱われている。
- 16 拙論が依拠した主な文献はミュス編 (Myß 1993)、ベーム (Böhm 2006)、トトク (Totok 1988) である。
- 17 Obergruppenführer
- 18 クリスタは交通事故で重傷を負い、肋膜を傷めた挙句結核を併発して 1942 年 11 月に死去した。その後シュミットは 44 年初め、ズィーベンビュルゲンのナチスの農業指導者の娘アデーレ・カウフメスと再婚する。
- 19 ズィーベンビュルガー・ザクセンの国籍はドイツではなくルーマニアであり、ルーマニアに対して兵役の義務があったが、徴兵の際ザクセン人がルーマニア軍を離脱して大量にナチスの武装親衛隊に加入した行為を指す。親ナチのアントネスク将軍が政権を掌握したルーマニアは、こうした行動を終始させて咎めなかった。そして千兵行動に参加した若い兵士の大半は東部戦線で戦死した。
- 20 ルーマニアには、800 年の植民の歴史があるルター派のズィーベンビュルゲンと、ハプスブルクが 18 世紀以来入植させたカトリックのドナウ川沿いのバナート、ウクライナにまたがるブコヴィーナ、そして少数ながらブカレストその他旧ルーマニア領に居住するドイツ系住民がおり、それぞれの利害は微妙に対立していた。ヘルマンシュタットは長らくズィーベンビュルゲンの中心で、オーストリアもここに政庁を置いていた。ルーマニアのドイツ系住民が多数の都市を築いたズィーベンビュルゲンが、居住領域の広さにおいても人口の上でも大多数を占めていた。第一次大戦後、マイノリティー存続の危機を前に、次第にこれらを区別する意味は小さくなっていった。そしてナチスによって一つの民族集団 (Volksgruppe) と規定されるのである。ズィーベンビュルゲン・バナート・ブコヴィーナの主要ドイツ言語語島とその歴史については鈴木 (1997) 及び鈴木 (2000a) 参照。
- 21 バナート出身のトトクがナチ時代と社会主義時代のルーマニアのドイツ系民族集団の内情を暴いた告発の書である。トトクは特に、チャウシェスクの時代を、原爆を投下された広島に似た惨状になぞらえて Cheausîma (チャウシマ) と呼んだ。ルーマニアのクリスマス革命の発端となる反政府的文芸グループ Aktionsgruppe Banat にも属した。クリスマス革命の 2 年前に出たこの書は、その後しばらくルーマニアのドイツ人たちの激しい反感を

買っていた。

- 22 1689年の火災で外壁全体が黒くなったためこのように呼ばれる、クローンシュタットの中心的ルター派教会。1385年に建設が開始された当時はカトリックの教会であった。
- 23 オスマン・トルコ軍の侵攻に対して、ザクセン人たちは周囲に高い城壁を巡らせたいいわゆる「要塞教会」を都市ごとに築き、そこに立て籠もって難を逃れようとした。クローンシュタット近郊のプレジュメールの要塞教会は世界文化遺産として有名である。大都市の中心に位置する黒い教会は要塞化していなかったが、クローンシュタットの町には、ドイツの古い町と同様の城壁（ブルク）が巡らされていた。
- 24 『ホンテルス生誕 500 年記念 クローンシュタットホンテルス校』には、武器を持って歩哨にたった生徒が、その存在を忘れられて一晩中任務にあたった手記（Gunesch 1998 S.55-58）など、当時の生々しい記録が見られる。因みにメッシェンデルファーはこの学校の第 93 代校長も務めた（在職 1927-1940。上記『クローンシュタットホンテルス校』S.21）。
- 25 2012年の調査の後、古書の収集で 1 号を除いて全貌を把握できた。文献表に出版された号を示す。
- 26 もちろん、ノバーリスの『ハインリヒ・フォン・オフターディングゲン』中のハインリヒの先導者としての登場人物の名に拠っている。ヘルマン・ロートは歴史や絵画に関する論文を 2 度掲載した。
- 27 1935年、日本では紹介が遅れている優れたユダヤ系ドイツ語詩人モーゼス・ローゼンクランツは、ロートから届いた「文字の一つ一つにナチ・ドイツ野郎流の実にかさまで居丈高な卑劣さが満ち溢れている」手紙に立腹して、H. ロートと決別するに至っていた（Gutu1990 参照）。
- 28 『南東ドイツ四季報』と詩については鈴木（2009）参照。
- 29 ここに引く二つの詩の他にもヤーコプ・ヒルシュの「前線の詩」（ViO 1942 Heft5/6 S.44）のような戦争を読んだ詩が散見されるが、残念ながら押しなべてレベルは同様である。
- 30 ViO 1941 Heft 6 S.74 A. ロートは 1930 年に「クリングゾール」に何度か詩を寄せているが、いずれもこの詩同様、あまりにも単純に韻文を仕立てすぎたものといわなければならない。程度の低い作品である。
- 31 ViO 1943 Heft 4 S.39 f. „Gedichte von Hilde Martini-Striegl” より。
- 32 Johannes Linke については不明。ViO (1943 Heft 1/3 S.32)
- 33 戦時中ツィリッヒはドイツ本国の参謀本部で将校の身分にあった。
- 34 *Klingsor* 16. Jahr Mai 1939 Heft 5 S.194
- 35 鈴木 2009 中特に『故郷通信』『四季報』『反映』と詩』の節参照。
- 36 鈴木（2009）付属資料『故郷通信』『四季報』『反映』編集関係者一覧』参照。
- 37 鈴木（2007）S.123 参照。